

ASOURCE®

[TIMES]

スペシャルインタビュー 池谷 保彦

(メディアスホールディングス代表取締役社長)

クローズアップ 安全・安心で快適な健診を目指して

特集 パラリンピックで活躍する競技用の車椅子と義肢

発行：メディアスホールディングス株式会社
制作・編集：株式会社トークス



SPECIAL INTERVIEW

持続可能な社会に向けて、 医療環境の明日を創造する

——— 池谷 保彦 (いけや・やすひこ)

メディアスホールディングス代表取締役社長

2020年は診療報酬改定が予定され、保険医療材料の償還価格も改定される見込みだ。人口の高齢化に伴う医療費増大に対する下げ圧力が長期的に続く中、医療機器供給を事業の柱とするメディアスホールディングスが、持続的に成長していくために何が求められているのか、代表取締役の池谷保彦氏に話を聞いた。

〇 重み増す高度急性期病院との信頼関係

2020年4月に診療報酬の改定が予定されています。薬価、医療材料の償還価格もマイナス改定が予想され、高額薬剤を中心に薬価や、当グループが扱う医療材料についても引き下げが見込まれます。

人口の高齢化に伴い、がんや生活習慣病をはじめとする慢性疾患が増加、医療費だけでなく、介護関連費用なども含めた社会保障費は増加の一途をたどっています。2025年には団塊の世代の約700万人が後期高齢者となり、社会保障費が急増することを前提に、医療費に対しては今後も長期的に下げ圧力がかかるでしょう。

昨年9月に厚生労働省は、診療実績が乏しいなどと判断した424の公立・公的病院に、統廃合を含めた再編の検討を求め、実名を公表しました。医療供給体制について改革を進めようとする厚労省の意志を感じます。これをきっかけに、高度急性期、急性期、回復期、慢性期という病院・病床の機能の再編や、病床削減などが進むものと予想されます。

当グループが主要取引先としている高度急性期病院も長期的には減っていくものと考えています。ただし、高度急性期医療を必要とする患者さんの数はあまり減少せず、特定の病院に集中するでしょう。したがって、地域で求められる高度急性期医療を提供できる病院との信頼関係の強化が、さらに重要になってきます。

〇 持続可能な社会のために当社ができること

医療機器・材料の償還価格改定は、過去14年間に7回行われました。中でも、最先端の治療を支えるものは内外価格差が大きく、償還価格改定の中心になることもあります。こうした中、最善の医療を安定的にお届けするために、私たちは「持続可能な社会」の実現に向けて取り組んでいく必要があります。

そこで私たちは、国際社会共通の「持続可能な開発目標 (SDGs)」17項目のうち、「すべての人に健康と福祉を」という当グループの存在意義でもある目標を軸に、新たな取り組みを始めています。例えば「住み続けられるまちづくり」では、メディメッセージなどを通じて、私たちのミッションである「地域医療への貢献」に取り組み、「つくる責任つかう責任」では、現場からの意見をフィードバックし、主に感染予防対策をコンセプトに、品質にこだわったPB品を提供することで、医療従事者の皆さまにとっての安心安全な環境づくり、および負担軽減に取り組んでいます。SDGsの詳細な取り組みについては、当グループのHPからご覧になれます。(https://www.medius.co.jp/sdgs/)

こうした医療環境に貢献する取り組みの積み重ねによって、各医療機関との信頼関係を維持しながら、医療環境の明日を創造していきます。

安全・安心で快適な健診を目指して 気配りと最新設備で利用者のストレスを軽減

平均寿命の延びとともに、病気の治療だけでなく予防にも関心が高まっている。医療機関では、そうしたニーズを取り込むために、検査設備や人材を活用して「健診センター」を併設するところが増えてきた。一方で、病院と切り離し、交通の便のよい立地に独立した健診センターを作る動きも出ている。最新の設備と快適な空間そしてスタッフの気配りで受診者を迎える健診センターの取り組みを例に、今後の健診のあり方を考えてみる。

コンパクトで快適な空間を演出

成人の健康診断には、労働安全衛生法で義務付けられた職場での健康診断、市町村が行なう特定健診、胃がんや乳がんなどのがん検診のほか、本人の意志で受ける「人間ドック」などがある。実施するのは委託を受けた病院や健診専門のセンターなどで、職場に検査機器を積んだバスを派遣することもある。

多くの健診では、受ける利用者が半ば義務感で受け、受診しない人も少なくない。受診率を上げるために、厚生労働省、企業や自治体は様々な手を打つが、それでも例えば特定健診の受診率は2017年度で53.1%にとどまっている。

一方で、健診事業は医療機関にとっては、それをきっかけに診療の対象となる人を見つけ出す窓口ともなる。検査結果に問題はなくても、毎年受診してもらえば、一定の収入につながるだけに、いろいろな努力を重ねている。病院に「健診センター」を併設し、病院の患者と健診受診者の動線を交差させないところが増えているが、病院とは全く別の立地に健診センターを新設する動きもある。

2016年に医療法人社団緑成会横浜総合病院（横浜市青葉区）が、東急田園都市線・横浜市営地下鉄のあざみ野駅前に開設した「あざみ野健診クリニック」もその一つ。本院はあざみ野駅からバスで約10分かかるが、健診クリニックは駅前のスーパーが入る建物の4階という便利な立地にある。

クリニックに入ると一般企業の受付のようなカウンターがあり、その奥の待合室には1人掛けソファが背中合わせに30脚ほど並ぶ。各検査を行なう部屋はその待合室から直接入れるようになっており、利用者の動線が短く設計されている。利用者は、クリニックに着くと専用の検査着に着替えたあと、この待合室に座り、ゆったりと検査の順番を待つことになる。

同クリニックの主任看護師の秋山梢氏は「かつては本院に健診センターを併設していたが、検査によっては病院の設備を使うため、普段着の患者さんと検査着の利用者の方が交錯し、利用者には抵抗感があった。ようやく順番が回ってきて、緊急検査が必要な患者さんが入ると、利用者の方は再び待たされることもあった」と話す。健診センター長の原砂織氏は「利用者にとって検査はストレス。それを少しでも軽減するために、病院とは違う場所に健診専門施設を作り、雰囲気作りにも工夫を凝らした」という。

最新機器で安全と精度の高さを実現

健診センターにとって最も大切なのは、安全かつ正確に検査を行なうこと。症状のない健康な人が、自分の健康の度合いを確認するために受診するだけに、あざみ野健診クリニックでは感染防止には特に力を入れている。

まず、医師、看護師、検査技師らスタッフにはスタンダードプリコーション（感染症の標準予防策）を徹底している。症状がないとはいえ、皮膚、粘膜、血液、体液、排泄物などはすべて感染性があるとして対応する。手で触れたら石けんで手を洗い、必要があれば手袋、フェイスシールド、マスク、エプロンなどを着ける。使用する医療材料のほとんどをディスポーザブルとし、子宮頸部の細胞診検査で使うクスコもディスポーザブルだ。便検査の検体はもちろん、尿検査の検体も自宅で採取してもらい、密封したものを検査当日に持ってくるようにしているため、感染源になる可能性のある尿がトイレから持ち出されることもない。消化管検査に用いる内視鏡については、日本消化器内視鏡学会のガイドラインに沿って洗浄・消毒を行っている。

安全を担保した上で、精度の高い検査を行なうために、内視鏡をはじめ、胸部X線検査装置、胃部X線検査装置、マンモグラフィーなどは最新機器をそろえている。特にマンモグラフィーは、近隣の医療機関や健診センターにはない3Dマンモグラフィー（別項記事参照）を導入した。

あざみ野健診クリニックでは、人間ドックのほか、横浜市民の健康診査・特定健診・がん検診、健康保険組合加入者の健診、就職、受験、海外渡航のための健康診断などを行っている。これらのメニューは他の健診センターと同じだが、人間ドックには多くのオプション検査がある。これは受診者のニーズ、つまり「健康への不安を軽減するために用意した」（原氏）メニューだという。内臓脂肪検査、骨密度検査、3Dマンモグラフィー、乳腺超音波検査、脳梗塞リスクマーカー検査、胃がんリスク検査などがある。

さらに、人間ドックとは別に専門ドックもある。脳ドック、心臓血管ドックのほか、この健診クリニックの特徴として「メモリークリニック」がある。これは、日本認知症学会専門医による診察、詳細な神経心理学的検査、頭部MRIを用いた画像診断（検査は横浜総合病院で実施）、生活習慣病をはじめとする危険因子の評価などから認知症発症リスクを判定し、予防へ向けての脳の危機管理をするというもの。高齢社会のニーズをとらえた取り組みといえよう。

○一人ひとりに寄り添うフォロー

こうした最新設備を活用しつつ、利用者の安心と満足度を高めるのは、スタッフの力によるところが大きい。秋山氏は「健康に不安があっても、このクリニックで検査したら元気が出てきた、と言われるように努力している」と話す。「検査は利用者の方にはストレスになる。少しでもリラックスして受けてほしい。清潔感のあるゆったりした空間作りはもちろん大切だが、鍵は私たちスタッフの接遇」だという。年に1度、スタッフ全員が接遇の研修を受けている。言葉遣い一つとっても、病院では「〇〇さん」と呼んでいたが、ここでは「〇〇さま」と呼ぶようにしている。「さま」と付けるだけで、それに続く言葉遣いが自然に丁寧になるという。言葉遣いだけでなく、挨拶、案内するときの手つき、扉の開め方など、接遇の指導は細部にわたる。

利用者のストレスを軽減する上で、あまり待たせず、スムーズに検査を受けられるようにスケジュールの管理と案内をするコンシェルジュ（事務スタッフ）の役割は大きい。午前は人間ドック受診者が30~40人、午後は横浜市の健診受診者が30~40人訪れる。受付時に本人の意向などを聞き取り、例えば採血の苦手な人はそれを一番後回しにする、内視鏡のオプション検査を受ける人なら、その前に呼気検査を受けてもらうなど、受診者それぞれの検査の順番を組み立て、しかも全体でも待ち時間が少なくなるよう、日々調整しているという。

あざみ野健診クリニックには、保健師が4人勤務している。主に特定健診の結果を元に行なう特定保健指導を担当しているが、2年以上にわたる特定保健指導の経験から「一歩踏み込んだカウンセリングを実施する予定」（秋山氏）になっている。これは、指導の結果、「自分らしい健康習慣」を身に付けた利用者が2年間で60人以上いたことから、秋山氏らが企画したもので「セルフケアカウンセリング」と名付けている。

保健師や栄養士が一人ひとりについて日々の生活の振り返りを行い、無理なく行なえる食生活や運動の改善を一緒に考えていくというもので、3カ月コース、6カ月コースなどを用意している。

「健康な人がさらに元気になれるように寄り添うのが、健



あざみ野健診クリニックの待合室。一人掛けソファが並び、落ち着いた雰囲気。すべての検査室の入口が待合室に面している。

診に携わる私たちの役割」と秋山氏は話す。健診センターの利用者の満足度を高めるためには、立地、設備、そして人の育成が不可欠になっている。

小さな乳がんを早期に見つける 3Dマンモグラフィー

あざみ野健診クリニックに導入されている3Dマンモグラフィーは、従来のマンモグラフィーが上下、左右からの撮影だけだったのに対し、角度を変えて複数の方向から撮影し、そのデータを元に3次元の断層像を構成する。この機能はトモシンセシスと呼ばれ、断層を意味するトモグラフィー (tomography) と、合成を意味するシンセシス (synthesis) から作られた造語。従来の撮影が2Dマンモグラフィーというのに対し、トモシンセシスは3Dマンモグラフィと呼ばれる。

約10秒間の連続撮影で、乳房全体を1mm間隔の細かい画像で表すことができる。2Dマンモグラフィーでは、乳房のすべての情報を1枚の画像にするため、病変が正常乳腺と重なり、発見しにくい場合があった。トモシンセシスによって、マンモグラフィーが得意とする微細な石灰化の描出に加え、これまで乳腺に隠れて見つかりにくかった小さな乳がんを発見しやすくなるとされる。また、これまでしこりと鑑別できないために、精密検査が必要だった例を約40%減らせるといわれる。



最新の3Dマンモグラフィー。横浜市で導入している医療機関は少ないという。



プライバシーに配慮した診察室。医師とゆっくりコミュニケーションできるよう配慮した。

いよいよ2020年オリンピック・パラリンピックイヤー

パラリンピックで活躍する競技用の車椅子と義肢

障がい者スポーツへの関心の高まりとともに車椅子をはじめとする障がい者スポーツ用具の開発も進み、素材の多様化と加工技術の進歩によって高機能化している。2020年の東京パラリンピックでは、選手たちの脚となって活躍する競技用の車椅子と義肢にも注目してみたい。

○ 高速化する陸上競技用車椅子

競技用の車椅子は、日常で使う一般的な車椅子とは異なる形状をしており、それぞれの競技の特性に合わせて進化してきた。例えば、車椅子マラソンなどで使用される「レーサー」と呼ばれる陸上競技用の車椅子（写真1）。高速走行を可能にするため、車体には軽くて丈夫なアルミニウム合金やチタン合金のほか、近年は振動の吸収率が高いとされるカーボンファイバーも使われている。空気抵抗をより抑えるために前輪が前方に出た3輪が主流で、選手は脚を折りたたんで低姿勢のまま、ハンドリム（手でこぐときに持つ部分）を上から叩くようにして力を車輪に伝える。その結果、トラックでは時速30キロ、マラソンの下り坂では時速50～70kmに達するほどの高速化を実現している。



写真1：陸上競技用の車椅子

○ 競技に合わせてオーダメイド

一方、テニス、バスケット、ラグビーなど競技用車椅子が一般的な車椅子と大きく異なるのは車輪の角度だ。一般的な車椅子のタイヤは地面に対して垂直だが、競技用はタイヤが「ハ」の字に傾く。これはターンやダッシュなどの動きに合わせて小回りがきくように設計されているからで、特に俊敏な動きを必要とされるテニス用は、他の競技用に比べて傾きが最も大きく約20度あるという（写真2）。また、体を大きく後ろに反らせてサーブしても倒れないように、車椅子の前後に小さな車輪が取り付けられているのもテニ



写真2：テニス用の車椅子

ス用ならではの工夫だ。

バスケットやラグビーなど選手同士が激しく接触する競技用の場合は、前足の部分に防御用のバンパーが付いているのが特徴だ。なかでもラグビー用車椅子は装甲車のように頑丈に造られており、攻撃型と守備型の2種類がある。攻撃型は相手の守備に引っかからないようにコンパクトで丸みを帯びた形をしており、守備型は相手の動きをブロックするためにバンパーが飛び出ている。車椅子の形で攻守を見分けられると東京パラリンピックの観戦もより面白くなる。

○ 義肢では3Dプリンタの活用も

競技用の義肢は、板を曲げたような形の陸上競技用の義足に象徴されるように独特の形状をしているものが多い（写真3）。これは選手の脚代わりとなり、「走る」「跳ぶ」「こぐ」などの動きを可能にするために作られているからだ。そのため、素材も進化しており、走行時には瞬間的に体重の8倍以上の負荷がかかる陸上競技用の義足の板バネは、航空機にも使われるカーボン繊維強化樹脂が使われている。反発力と推進力のある素材を用いたことで、走るだけでなく跳ぶことも可能になった。その超人的なパフォーマンスは観る者を楽しませてくれるが、健常者と競うことについては義足の有利性を問う声もある。

義肢の場合も競技の特性によって性能や素材は異なるが、いずれの義肢を装着する場合も「ソケット」と呼ばれる部品が必要になる。このパーツはユーザーごとに形状が異なり、ぴったりフィットさせるために細かく調整しなければならないことから3Dプリンタの活用が検討されている。また、最新の技術では、ロボット関連技術の発展に伴い、筋電義手・義足の障がい者スポーツへの応用も期待されている。



写真3：陸上競技用の義足

写真提供：株式会社エランシア